



Aoi

わたしは生活ができない。
もちろんちゃんと生きているし、
毎日、起きて寝て、食べて
過ごしているんだけど。

わたしはとても怠惰だと思う。
そして気まぐれだ。
それが許される環境にいて、
それを甘受している。

わたしはまるでよくしつけられた
猫みたいだと思うことがある。
実際、猫の気持ちがわかる気さえ
するから不思議だ。

それでも生きることはいばらの道だと
わたしは思う。楽しいこと、嬉しいことが
あってもなおそう思う。
そして、そう思いながらも、ゆらゆらと
生きて、ふわふわと漂って、日々を
過ごしている。

柵のない檻にわたしはいるみたいだ。
いつでも出られるけれど、わたしは
必ずそこに戻ってしまう。それは
この檻の中以外で、わたしが生きては
いけないことを知っているから。

人間って不思議な生き物だと思う。
競いたくなくても、競わなければならない
ことが多いし、そうなれば勝ち負けができ、
それによって喜んだり、悲しんだりの感情を
否がおうにも持たされてしまうことになる。

○○は素敵。○○は綺麗。○○は可愛い。
○○に入った人は嬉しいけれど、それは
他に比べられる対象があって初めて成立
する言葉だ。見えないたくさんの誰かが
無意識のうちに、または意識的に比べられて
いる。それに気がつかないのは悲しいことだ
と思う。比べていないと思っていたとしても
何も判断基準のないところで評価なんて
実際は出せるはずがない。そうじゃない
ものがあって初めて成立する言葉だ。

わたしは普段、あまり理屈っぽいことを
人に言ったりしない。批判したりもしない。
だからと言って何も考えていないわけでも、
感じていないわけでもない。言わないだけ。

わたしの名は「みるく」。甘ったるいような
冷たいような名前だと思う。でも自分では
意外と気に入っている。

ころんちゃんとお会ったのは高校生のとき。
4月の入学式の前に説明会があって、そのときに見かけ、清楚で可憐な姿を目で追ってしまった。

ころんちゃんはきっとそれまでも人に見られる人生を送ってきていたと思う。わたしが見ていたことも気がついていたら、後で話したときに言っていた。でも悪意のない視線だったからイヤな気分にはならなかったよと。

ころんちゃんとは音楽を聴きながら一緒に歌詞に吸い込まれて思わず泣いてしまったことがある。ころんちゃんはいつもわたしが傷ついたりしていないか、気にかけてくれていた。そしてどんな些細な変化も見抜いて心配してくれた。ころんちゃんのいるところならわたしは安心してその場所にいられた。わたしを本当の意味で理解してくれる人は少ないけれど、その少ない人の中でもころんちゃんはまっすぐに本当のわたしを見てくれていた人だと思う。わたしの言葉がちゃんと伝わると感じられる友達。

友達というのは会っている時間が長ければ親しいとは言いきれない。その時間の密度と交わした言葉の理解の深さの度合いによって決まるものだと思う。そして核の部分で信頼し合えていれば離れている時間があっても友情の本質はきっと変わらない。

ころんちゃんは美少女という言葉がぴったりハマル女の子だった。特に微笑みを含んだ形の唇が美しく、今もそれは変わらない。

あかりさんと出会ったのはわたしが大人になってから。同じ職場の上司にあたる人があかりさんだった。

あかりさんはとても不思議な人。しっかりしているし、自分を持っている。でも一緒にいるとよく笑い合う。うふふと見詰め合って笑ってしまう。楽しい時間をたくさんくれる人。それは本当に有難いこと。一方的に話を聞くわけではなく、互いに互いの言葉を引き出しあえるってこういうことなんだと教えてくれた人。あかりさんに「あなたは同じ年の人といると難しい関係になってしまいかねないわね」と言われたことがある。年の離れているあかりさんだからこそこんなふうに仲良くなれたのかもしれない。あかりさんはわたしをととても温かく優しくそっと大切に包もうとしてくれた。ただ側にいてくれるだけで安心すると言ってもくれた。目と目で会話ができるそんな信頼関係を結べた人。

あかりさんは女優さんの数名に似ていて若い頃とても人気があって、今でも色香のある素敵な女性だと思う。感性も鋭くて、わたしの変な表現にも懐の深い理解を示してくれる。でもきっとわたしとはまったく違う世界を生きている人。